校友時報

昭和53年12月21日
編集人兼発行所
秋田県能代市高場2番1号
秋田県立能代高等学校新聞部
印刷所 ㈱大勝堂印刷

部説　学校新聞のあり方とは

我が校友時報も先号で発行一六〇号を迎え、新聞部も今年で創立三年を記念するに至った。にもかかわらず、ここ数年は企画のマンネリ化、記事のつまらなさなどが指摘され、新聞本来のあり方が叫ばれている。ここに新しい等一歩を記すべく、今一度、我々に与えられた使命を顧みたいと思う。

新聞部は昭和二十三年、文芸部の新聞班として発足した。初期の頃、予算は新聞販売による売り上げで賄なわれ、自分達で作ったガリ版刷りの（後にタブロイド版）を売るために奔走していたという。従って、当然のことながら、生徒は新聞を選ぶ権利があり、生徒受けのする、良いものはたちまちのうちに売れ、企画のあいまいな、自分達本位の生徒の興味に添わない新聞は売れ残ってしまう。思うに、その当時は生徒が主役だったのである。当時の編集者にとって、生徒の意見の反映されたより良い新聞を作ることが、新聞部を続けさせてゆく上での絶対的条件であったわけである。そうでなければ資金調達はできなかったのだから。

この現実は極めて厳しかったに違いない。より良いものを生徒に与える。生徒をまた、より興味深い、より共感を得るような新聞を期待する。このような需給関係が新聞の技術的・内容的発展を促進したに違いない。

しかるに今はどうであろうか。予算面では潤沢することもなく、年五回の発行もなんとかできるに至った。しかし、肝心の生徒の反応はサッパリ。中には紙飛行機と相変わって、校内を飛び回ることもある。三無主義・シラケ時代に代表される現在の状況を打破すべく投げたメッセージは無惨にもゴミ化してしまう。いったい、どれだけの人が校友時報を真面目に読んでくれているだろう。

そして、そんな現在の状態で我々の新聞は十分に、学校新聞本来の使命を果たしていると言えるであろうか。

そう考えみて、過去の新聞に目を通して見ると「声」の投書欄やまた、部説・時評などでの自己主張が多いのに気付く。「声」では本校生ばかりでなく、北高志向にはある書店の本校生に対する意見や苦情も載せられている。それぞれこの校友時報は本校生のみならず学校関係の人達からも利用されていたのだ。それ

うだ。学校新聞とはみんなのものなのだ。全校生徒が主役なのである。我々は、生徒間の心と心を結ぶ橋渡しに過ぎないのだ。学校生活で生じた数々の問題点・疑問点を生徒の前へ投げかけ、共に考える。そして、正しい解決策を導く。そのために、公平な目とその役割が我々新聞部が果たすのだ。それが我々の使命なのであり、学校新聞の目的発展を促進したに違いない。

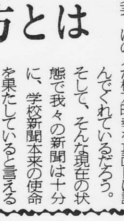
本質ではないだろうか。

至る所に活動の跡　新執行部

九月末に生徒会の新役員が任命されてからおよそ三か月が経過した。前会長の鎌田健二君から新会長の佐藤仁君にバトンタッチされてから、生徒会活動はどう運営されているだろうか。

現在、熱行部には、部長の石井鉄君（2F）を初め、一・二年生全部で十一名の部員がいる。現在の活動は、卒業文集〝白濤〟の編集、また二年ぶりの予餞会の計画などであるが、今は文集が忙しくその編集以外の事には手が回かないという話である。

最近、校内で「熱行部は、遊んでいるんじゃないか」「今の熱行部は不活発だ」などの声が聞かれるが、生徒会室に一歩入ると至る所に活動の跡が見られる。そのことに関して佐藤会長は、「目立つ仕事だけを活動とは思わない」と言い切った。そして、越前副会長も「部内のチームワークは抜群だが全校生徒との協力を呼びかけたい」とつけ加えた。


佐藤会長

越前副会長

困難な購買設置

ところで、全校生徒が熱行部に対して一番興味深い事は、購買設置の件であろう。副会長の越前君が過去幾多の選挙演説で訴えたその問題、だが、その後の経過は不明である。「やっぱり口先だけだった」とか「人気を得るための設置は、また先になりそうだ。不活発だという印象を抱いての新執行部への取材。終ってみると様々な面に活動の跡が伺えた。そして、今回痛感した事は、一般生徒の生徒会への無関心さである。もっと生徒会に興味を持とう！

新改革に挑む百八十名　共通一次

●来年一月十二・十四日に実施される国公立大学による共通一次試験まであと三週間と迫り、受験生は最後の追い込みをし……

●……ていることだろう。共通一次は従来の入試制度改革が目的であるが、また生徒りの状態で幾つかの問題もある。しかし、……

●……受験日も迫った今となっては、そういう問題はさておき、蓄えてきた力を思い切りぶつけてほしいものだ。

国公立大学の新入試制度、共通一次試験が来年一月十三・十四日に実施される。本校では二百四十一名（現役百八十・浪人六十一）がこの受験を志望している。

今年の国公立大受験者は併願ができないため、昨年より百名程減少した。そのかわり私立大の併願が多いようである。ここで問題なのは共通一次は新しい試みで、これが最初の資料となるため、簡単に判断を下すことはできないということだ。また今年の特徴は、秋田大学への志望が多いものの、志望校が全国五十一大学に分散していることである。また表から、短大・準大・各種大への志望が減少していることに気づく。

重要な基礎力

共通一次は「教科書中心の基礎力を見る出題により、高校教育を正常化する」「一期・二期の期別廃止」「二次試験による各大学の特性をいかす」などを目的としている。しかし受験科目が七科目に増え、入試時期も早いため、受験生にとっては負担になっているようだ。また、一回のチャンスなので大学選択が困難となり、足切りをする大学が五十二校もあるので多少の不安もあるだろう。そして私立大も難化の傾向にあり、「国立が駄目なら私立で」ということも難しくなるであろう。

進路指導部では、一次試験対策として「まず最業を大事にし、基礎力を養うこと」二次試験対策として「得意科目をつくること」を呼びかけている。特に一・二年の勉強が重要なので、常にフィードバックが必要であるようだ。

共通一次は大学入試制度の新ステップであり、一つの手がかりである。いくつかの問題点はあるものの、受験生はいたずらに不安をもたず、ひとつづつ確実に、そして基礎力を充実させて、あと三週間と迫った共通一次に臨んでほしい。

活発な意見が…

進路志望状況　（12月5日現在）

	国立 文	国立 理	私立 文	私立 理	短大	準大	各種	就職	未定
A	15	5	23				1		3
B	16	1	24	1				4	2
C	20		17	2			5	2	1
D	25	1	13		1		2	4	1
E	22		19	1			1	2	3
F		39		11					1
G		36		11			3		
計	98	82	96	26	1		12	12	11

東北大会出場ならず　演劇部

十一月二十六日、第九回秋田県高校選抜演劇発表会が秋田市の産業会館ホールで行われた。この大会には地区大会に出場した四十四校の中から代表一校が選ばれ、その演技を競い合った。

本校演劇部は、シード校として十一月十九日、能代北高体育館で行なわれた地区大会の代表である能代工業高校と共に、この大会に出場した。残念ながら東北大会は、花輪高校と五城目高校の出場が決まり、本校の五年連続の東北大会出場の夢は消えてしまった。

今年の夏、全国大会で優秀校に輝いた演劇部だっただけに、今大会での入賞もの悔しさはひとしおだったと思われる。

本校は、大会の五番目に安部公房作「棒になった男」という喜劇調の作品を上演した。発声など基本的なテクニック面では他の代表校に差をつけ堂々とした演技を披露したが、審査員から「テクニックは勝れていたが、喜劇として少々張り込み過ぎ重くなってしまった」と講評された。

また、顧問の野田先生はこの大会での反省を二演技を内面化していくための時間的なプロセスがなかった」と語っておられた。

なお、東北大会の出場権を逃がしたものの、これからさらなる声などの基礎練習に励んでいる。このあと、また出し物はまっていないが、月に行なわれる予餞会での好演技が期待される。

幻の校舎救う定期バス

能高生にとって最も嫌な季節〝冬〟が到来した。

猛吹雪で校舎が見えなくなり幻の校舎と呼ばれたのは、つい二三年前のこと。昨年からは、定期的にバスが運行され幻の〝幻〟を知る者は、今では二年生だけとなってしまった。

少々寂しい気もする。

しかし、我々は今こそ、バスの存在を見直し、素直に感謝すべきではなかろうか。

今年の夏、全校生徒が汗水たらして次に紹介したい思う。先に、自殺についての投書より「死に追い込まれた者が、他人に相談した時に、相手は本気で受けとめてくれるのだろうか。―略―死を相談された時に、その相手を説得できる者が多数いる事を渇望する。寛容な気持ちで、一人残らず仲間になれたなら、孤立する者は大切だし、大人も頼りになるんだと思う」（三年男）

他にも、投書を受けたが、残念なことができなかった。が、どれも考えさせられるような良い意見ばかりであった。これから、我々新聞部は、全校生徒の意見（投書）を基にもっとよりいろいろな面を取っていきたい。どんな小さな事でもあなたの率直な意見を是非〝声のポスト〟へ。

参加者募集!!

市内JRC連盟では、北高を首長として毎週土曜日3時30分より公民館第二会議室にて手話講習会を開催、参加者募集しています。

座談会　活発な意見飛び交う

先月末、新聞部主催で〝高校生と非行〟と題した座談会を行なった。当日は、数多くの活発な意見が飛び交い、見事成功に終わることができた。詳細は、先の号外の通りであるが、先だって声のポストを開いてみたところ、その事に関する投書が殺到、この紙面を使って次に紹介したい思う。

先に、自殺についての投書より「死に追い込まれた者が、他人に相談した時に、相手は本気で受けとめてくれるのだろうか。―略―死を相談された時に、その相手を説得できる者が多数いる事を渇望する。寛容な気持ちで、一人残らず仲間になれたなら、孤立する者は大切だし、大人も頼りになるんだと思う」（三年男）

他にも、投書を受けたが、残念なことができなかった。が、どれも考えさせられるような良い意見ばかりであった。これから、我々新聞部は、全校生徒の意見（投書）を基にもっとよりいろいろな面を取っていきたい。どんな小さな事でもあなたの率直な意見を是非〝声のポスト〟へ。

次に、非行に関した中から、「規則は、若者の為を思って作られたのである。決して苦しめる為ではないはずだ。―略―他人に迷惑をかけられないのは当然の事。だから、少しでもそう心がけようと、各々、自覚していれば、環境もよくなるはずだ。しかし、弱い人間だからどうしようもない時だってある。そんな時は、周りで支えてくれる人が必要。だから友人は大切だし、大人も頼りになるんだと思う」（三年男）

次に、非行に関した中から、「規則は、若者の為を思って作られたのである。決して苦しめる為ではないはずだ。―略―他人に迷惑をかけられないのは当然の事。だから、少しでもそう心がけようと、各々、自覚していれば、環境もよくなるはずだ。しかし、弱い人間だからどうしようもない時だってある。そんな時は、周りで支えてくれる人が必要。だから友人は大切だし、大人も頼りになるんだと思う」（三年男）

「生きるなんてばかばかしい」などが原因のほとんどである。実に抽象的ではないか。第三者の立場で彼らの心情を捕えるということは、まるで雲をつかむようなものである。だが、それでいて考えずにはいられない。それは決して高慢なんかじゃない。かといって批判でもない。だから「甘ったれんじゃないよ」という大人の頭ごなしの批判には正直のところ反発心が起こってしまう。▼死に対しての考えは、まさに十人十色である。だが、ほとんどは「死んだ花実が咲くものか」というような考え方に集中する。中には死を美の対象と考える者も少なくない。たとえば、外国のある作家の「自殺とは人間にとっての唯一の自由である」とか太宰治の「人間は死ん室って初めて完成されるのだ」という言葉もある。しかし、これらの言葉も単純に自殺を推奨しているとは思えない。▼人間は弱い生き者である。自分の問題を見ればほとんどが困難の壁である。しかしそれを乗り越えてこそ幸福をつかみとれるのであろう。その壁に向かっていくところに真の若者の生き・・・がいがあるのではないか。

電電東北入り!?　高松投手

今年の夏の甲子園大会で高校No.1の左腕と騒がれた本校野球部エース・高松志者は、今、進路に関して大きな岐路に立たされている。「果たしてプロ野球へ進むのか!?」の質問に対して、彼は黙して語らず。

甲子園では初戦で姿を消したものの、その実力は誰もが認めるところであり、韓国遠征の日本選抜チームにも参加した。ドラフト前にすでに全球団からの交渉があったがプロ入りを拒否していたため十一月十二日のドラフトでは指名されなかった。しかし、当然ドラフト外での交渉は、予想されたとおりの問題だと思っていたが、実際は高に承諾書を提出して、それが認められないといけないそうだ。

―その承諾書は提出したのか？

―提出していない。まだ先生と話し合っている段階だ。

―一般生徒は尚も状況を知らないから、もう少し会報が何かで活動の姿を表してほしい。

それもそうだ。まだ不慣れだから…。今度から努力をしたい。

このインタビューの通り、購買設置は、まだ先になりそうだ。不活発だという印象を抱いての新執行部への取材。終ってみると様々な面に活動の跡が伺えた。そして、今回痛感した事は、一般生徒の生徒会への無関心さである。もっと生徒会に興味を持とう！

購買を設置する際は、校内外からの問題だと思っていたが、実際は高に承諾書を提出して、それが認められないといけないそうだ。

―その承諾書は提出したのか？

―提出していない。まだ先生と話し合っている段階だ。

―一般生徒は尚も状況を知らないから、もう少し会報が何かで活動の姿を表してほしい。

それもそうだ。まだ不慣れだから…。今度から努力をしたい。

―購買はどうなっているのか？

―また少々先の話になりそうだ。

―その事に関して努力はしているのか？

―どんな努力をしているのか？

努力はしているのだが…

彼は黙して語られた。

すでに、彼は電電東北への就職内定している。社会人として野球を続けるという彼の決心は堅いようだが、無言の高松君の去就が注目される。

幻の校舎救う定期バス

今年の夏、全国大会で優秀校に輝いた演劇部だっただけに、今大会での入賞もの悔しさはひとしおだったと思われる。

本校は、大会の五番目に安部公房作「棒になった男」という喜劇調の作品を上演した。発声など基本的なテクニック面では他の代表校に差をつけ堂々とした演技を披露したが、審査員から「テクニックは勝れていたが、喜劇として少々張り込み過ぎ重くなってしまった」と講評された。

また、顧問の野田先生はこの大会での反省を二演技を内面化していくための時間的なプロセスがなかった」と語っておられた。

なお、東北大会の出場権を逃がしたものの、これからさらなる声などの基礎練習に励んでいる。このあと、また出し物はまっていないが、月に行なわれる予餞会での好演技が期待される。

道交法が改正されました

この時期に
総点検・分解掃除
をしてみては……

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

二輪のことなら
なんでも

ブリヂストン・ミヤタ
ホンダ・ヤマハ・スズキ

佐々木輪業

能代市役所前☎②3329（サササフク）

点点点

▼最近、社会問題に大きな波紋を投げかけているのが青少年による自殺行為である。毎日報道される新聞の中に、必ずといっても過言ではないほどこの種の記事が掲載されている。

▼先日、某新聞に全国の自殺に関しての調査結果が報道されていた。年代別に見ると三十五歳～五十歳までが、実に全体の三分の一以上を占めていた。原因は、多額の借金などによる生活の行き詰まりから生じたものが第一だった。▼この調査結果から見ると、青少年の自殺の数は前例の年代に比べると下回るものの、毎年増加の一途をたどっているという事である。ここで最大の問題になるのは、こうした自殺という冷たいレールの上をたどらねばならなかった若者達の心中である。▼「友人がいない」「生きるなんてばかばかしい」などが原因のほとんどである。実に抽象的ではないか。第三者の立場で彼らの心情を捕えるということは、まるで雲をつかむようなものである。だが、それでいて考えずにはいられない。それは決して高慢なんかじゃない。かといって批判でもない。だから「甘ったれんじゃないよ」という大人の頭ごなしの批判には正直のところ反発心が起こってしまう。▼死に対しての考えは、まさに十人十色である。だが、ほとんどは「死んだ花実が咲くものか」というような考え方に集中する。中には死を美の対象と考える者も少なくない。たとえば、外国のある作家の「自殺とは人間にとっての唯一の自由である」とか太宰治の「人間は死ん室って初めて完成されるのだ」という言葉もある。しかし、これらの言葉も単純に自殺を推奨しているとは思えない。▼人間は弱い生き者である。自分の問題を見ればほとんどが困難の壁である。しかしそれを乗り越えてこそ幸福をつかみとれるのであろう。その壁に向かっていくところに真の若者の生き・・・がいがあるのではないか。